



●2025 年度のスタート

こんにちは、元色彩教材研究会主査の吉澤でございます。新年度になりましたが、冬に戻ったかのような寒さからのスタートとなり、自身が所属している研究棟改修明けの引越し作業で体を温めております。

今年度の幹事会役員が決まりましたので、お知らせします。

- ・主査：山根千明 ・副主査：渡邊裕美
- ・幹事：榎芳栄、昆野照美、鈴木章子、田森恭子、水野智子
- ・顧問：吉澤陽介・ 監事：井澤尚子
- ・特別顧問：北畠耀・永田泰弘

山根千明新主査のリーダーシップのもと、新しい体制の色彩教材研究会をどうぞよろしく願いいたします。

追伸：①かねてお伝えしております「名簿のリセット」は、近日、学会メール「2025年度色彩教材研究会会員募集」の形でお知らせをいたします。

②：顧問となりました吉澤ですが、日本色彩学会の理事になるかどうかの瀬戸際に立たされております。どのようになるか読めませんが、選挙の結果に関係なく、引続き色彩教材研究会を楽しいものにしていきたいと考えております。 (顧問：吉澤陽介)

●「色み」考

私たちはごく普通に赤み、青み、色みという言葉を使います。赤みを帯びた、青みがかった、色みのない無色の…などと言います。

この「み」は、程度を表す接尾語で形容詞の語幹についてこれを名詞化する…と辞書にあります。赤や青は活用語尾がついて形容詞として使われます。ところが色は名詞であって形容詞の語幹ではありません。

私の尊敬する色彩学の先生は、色みに違和感を呈されていまして。色みは日本語としてはおかしいところがあるということでしょうか。確かに手元の定評ある辞書には色みという見出し語は載っていないのです。

一方、JIS Z 8105「色に関する用語」には、色みの項目 3021 があり、彩度、クロマの項目 3023 にも色みが説明に使われています。こうしてみると、色みという言葉は、毎日新聞校閲センター@mainiti-kotoba 氏の言うように業界用語なのかも知れません。

もう一度辞書に戻ると、先の辞書にあかみ[赤み]の項目があり、用例として赤み上戸があげられ、その説明の中で色上戸、色み上戸が使われています。

言葉は生き物、そのうち見出しにも載るかも知れませんね。 (久下靖征)

●366 日ヨーロッパの伝統色図鑑・こぼれ話 3

酸化鉄の赤い酸化鉄顔料(オキサイド・レッド)は、産地によってさまざまな伝統色名が生まれ、まずは 17 世紀に「インディアン・レッド」が現れます。ヨーロッパではスペインのスパニッシュ・レッド(1854 年初出)も生まれますが、古くからある「ヴェネチアン・レッド」(1753 年初出)が有名でした。

ペルシア産の深みのある赤であるパーシアン・レッド(Persian Red)は 1835 年に、アラブ産の暗い赤、アラビアン・レッド(Arabian Red)は 1928 年に登場します。

これらは近代になってから、ファッションやテキスタイルの分野において、異国的で独特な魅力を表すエキゾチックなイメージカラーになっていきました。

1909 年から 20 年間に渡って舞台芸術に革新をもたらしたフランスを拠点に活動したロシア・バレエ団「バレエ・リュス」。レオン・バクストによる舞台装置やコスチュームにはこれらの色が効果的に使用され、くすんだ色調に慣れ親しんでいたヨーロッパ中を驚かせました。日本で斬新な舞台を創出している熊川哲也率いる K バレエカンパニーでも、「海賊」などの演目で多用し、オリエンタルなイメージを演出しています。 (橋本実千代)